

# 国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2年次生 田口真希

## 1. はじめに

この度、国際交流基金助成金を受けて、台湾・トルコ・インドネシア・クロアチアからの留学生4名と薬学に関する勉強会をしました。留学生は関西に滞在し、留学期間中のうち2月5～6日の二日間、大阪薬科大学の先生方・医療系同好会 PARC・弓道部・茶道部の協力の下、大阪薬科大学内で国際交流をさせていただきましたので報告いたします。

## 2. 日程と内容

2016年2月5～6日

1日目：英語で服薬指導、日本文化体験(34名)

2日目：生薬学実習、世界の薬学制度についてのプレゼンテーション、医療についてのグループディスカッション(21名)

( )内は全参加人数



(写真1) 正門前で

## 3. 英語で服薬指導体験

1日目には、大阪薬科大学のスミス册子先生、神戸学院大学の野口ジュディ先生、さらに薬剤師であり医療通訳も行っている同志社女子大学の天ヶ瀬葉子先生を講師としてお招きして英語で服薬指導の練習をしました。また、国によって薬の種類・飲み方が異なることも知ってもらう目的で勉強会を開催しました。参加人数は26名でした。

まず、ワークショップを始める前に、3年生の野田実希さんと山本真実さんにレクリエーションとして「共通点ゲーム」をしてもらい、参加者と留学生とがコミュニケーションをとりました。講習会が始まると、4つのグループに分かれて天ヶ瀬先生による英語のみでの講義が始まりました。

まず、「子どもの頃、薬をどのように服用していたか」を聞かれました。留学生は水に溶かしたりそのまま飲んだりするそうで、国によって粉薬はないところもありました。その後、天ヶ瀬先生から薬局で使用している分包機を映像とともに紹介していただき、その後、薬包紙の折り方を学びました。練習として薬包紙を折っていると、留学生は積極的にそれぞれ自国の薬包紙の折り方を紹介



(写真2) 薬の飲み方

してくれました。(写真2)驚くべきことに、クロアチアは日本のような薬包紙のような紙ではなくて、筒状のものを使っていると言っていました。実際に薬局でも、そのようにして包んだ薬を患者さんに渡しているそうです。また、トルコでは薬包紙がもっと大きいそうで、折り方も異なり簡単で且つ薬がこぼれにくい折り方でした。薬包紙の折り方を学んだあとは、処方箋を英語で作成し、実際に粉ジュースを使った模擬散剤を分包して処方箋の通りに薬を処方しました。(写真3)



(写真3) 分包中

次に、服薬指導を三つのシチュエーションに分けてロールプレイング方式で練習しました。一つ目のロールプレイングでは、三人で子供の患者さんとその保護者、薬剤師になりきり、粉薬の飲み方についての服薬指導をしました。子供の患者さんが苦い薬が苦手な場合を想定して、「お薬ゼリー」を利用しました。二つ目は、ペアで高齢者の患者さんと薬剤師になりきり、ラムネやチョコレートを錠剤として服薬指導をしました。高齢者は薬の量が多いことやそのままの薬を服用するのが困難な場合を想定して、服薬の際に「お薬ゼリー」を使用したところ、留学生はとても興味を持っていました。また、喘息の患者さんと薬剤師になりきり、インヘラーを使用した吸入器の使用方法も説明をしました。薬の種類、飲み方が国によって異なること、吸入器の使い方、英語で服薬指導をするポイントや方法を学ぶことができました。

私は、この勉強会に参加する前までは、英語を話すことに壁を感じていましたし服薬指導を英語でできるとは全く思っていなかったのがこの勉強会に参加したことで大学の授業では学べないような貴重な体験をすることができました。今後さらにグローバル化していく日本で働いていかなければならない私たちにとって必要な経験ですし、ここで学んだことが活かせるように自分でも勉強をし続けたいと思いました。また、留学生も「病院での実習はしてきたが、このような患者さんに対して服薬指導を練習したことがなかったのでいい経験になった。」と言っていました。参加した学生は「初めて薬学関連の授業全体を英語で受けたのでとても良い経験になった。先生方の説明を理解できたことがうれしかった。今後も英語の学習を続けていきたい。吸入粉末剤の吸入器、錠剤の喉の通りを良くしたり、苦い粉薬を包む「服薬ゼリー」を体験できたことが興味深かった。」と言っていました。英語で服薬指導をするというスキルアップだけでなく、薬学についての興味を深められ、海外と日本の相違点も知ることができるような勉強会になりとてもよかったです。

このような素晴らしい勉強会を共に企画、協力してくださった大阪薬科大学のスミス朋子先生、同志社女子大学の天ヶ瀬葉子先生、神戸学院大学の野ロジュディ先生、インヘラ

一を調達してくださった、大阪薬科大学附属薬局薬剤師の鈴木靖規さん、錠剤の分包をしてくださった大阪薬科大学教授 荒川行生先生、お忙しい中ご尽力いただき誠にありがとうございました。心から感謝致します。(写真4)



(写真4) 講師の先生方と参加者

#### 4. 日本文化体験

英語で服薬指導体験をした後、日本文化を体験してもらうために弓道部、茶道部の協力の下、日本文化体験をしました。弓道では、最初に弓道部員の方による実演を見せてもらいました。厳かな雰囲気の中で放たれる矢、静かな中に響き渡る的に当たった音はとても気持ちがよく、日本人の私たちでさえ感動しました。その後、実際に弓を引き弓道の難しさを体験しました。(写真5)



(写真5) 弓道体験中

(写真6)

茶道体験では、実際に茶道部の方に抹茶を立ててもらい季節感のあるかわいらしいお菓子とともにいただきました。その後も掛け軸に書いている日本語の意味や、茶道の歴史、お手前の意味、説明、大学のことや趣味の話などもして、日本文化も知り、国際交流もすることができました。私自身も茶道のお手前を知らなかったので大変勉強になりましたし、日本文化をさらに知ることができました。(写真7)

参加した茶道部の学生は「留学生のみなさんがいらっしゃるということで和を感じて頂けるよう、和菓子とお茶を準備しました。留学生が飲み易いようにお茶を少し薄めにするなど配慮しました。みなさんがお茶の文化に興味を持って下さりとてもうれしく思いました。」とっていました。

協力してくださった弓道部の皆さん、茶道部の皆さん、茶道部の外部講師の方、厚くお礼申し上げます。



(写真6) 弓道部員と留学生



(写真7) 茶道部員と留学生

## 5. 生薬学実習

二日目には、大阪薬科大学 芝野真喜雄先生の協力の下、生薬学実習として紫雲膏作りと葛根湯を煎じ、日本の伝統的な薬を調剤することで生薬学を学びました。

四つのグループに分かれて留学生に英語で説明しながら実験をしました。(写真8) 台湾からの留学生は以前にも紫雲膏を作ったことがあるらしく、台湾の学校で作ったものを持ってきてくれました。日本で作ったものと台湾で作ったものは作り方が違うらしく、同じ薬でも国によって作り方や使用する生薬の分量が異なることを知りました。

クロアチアからの留学生は生薬学に大変興味をもっており、クロアチアの大学の教授が生薬について教えてもらったことがきっかけで勉強していたそうです。実習の際に生薬の標本や生薬を見てとても感動していました。クロアチアにはないので少し持ち帰りたいということで少しずつサンプルを分けてもらいました。ほかの留学生たちも非常に喜んでいました。



(写真8) 実験中の様子



(写真9) 芝野先生と留学生

私は実験中に使用した生薬の効果などを聞かれ、授業や実習で学んだことを思い出しながら説明しました。留学生に説明できたことで勉強したことが役に立ったと感じとてもうれしかったですし、もっと詳しく知っていればよかったのにも思いました。また、ラテン語名や英名を言えばすぐに理解してくれたので、海外の薬学生のレベルの高さに驚きま

した。

協力して下さった芝野真喜雄先生、谷口雅彦先生、お忙しい中、実験の準備とご指導をして頂き本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。(写真9)

## 6. 薬用植物園見学

予定に余裕が生じたので大阪薬科大学内の薬用植物園の見学もさせて頂きました。偶然にも職員の方がいらっしゃったので簡単に植物園の説明をして頂きました。しかしながらちょうど見学した時期が2月でしたのであまり植物は見られませんでした。主に梅とタンポポの説明をして下さいました。(写真10) 職員の方の説明を3年生の島田麻里さんを中心に英語で通訳をし、何とか伝えようと必死に英語で植物について説明しました。(写真11) 他にも温室を見学しました。台湾の留学生は、「自分の大学でも生薬学は勉



(写真11) タンポポの説明をする職員の方と通訳をする島田さん



(写真10) 梅の説明を聞く留学生ら

強しているがこんなに広い植物園はなく、生薬を観察するためには山に登らなければならない。」と書いていました。大阪薬科大学にある植物園は広くて観察しやすく、種類も豊富であることに改めて気づかされました。

説明して下さいました職員の方、本当にありがとうございました。

## 7. プレゼンテーション

実習後は留学生一人ずつと日本人学生からパワーポイントを使って薬学部についての説明と薬剤師の働き方などについてプレゼンテーションをし、意見交換をしました。参加者は21名でした。私から日本の薬学制度と大阪薬科大学について説明し、2年生の吉田舞衣さんが流暢な英語で薬剤師の働き方について説明しました。どの留学生も素晴らしいパワーポイントでわかりやすく説明してくれました。日本は大学で6年間勉強しなければなりません、他国では5年間というところが多かったです。また、日本の薬学部のある大学の数を聞いてとても驚いていました。日本にはたくさんの薬学部がありますが、海外では薬学部のある大学はとても少なく、とても狭き門だということを痛感しました。どの国の薬学生も勉強や実験が大変で忙しいと言っていました。これを聞いて、もっと勉強しなければならないと感じましたし、薬学生の世界基準を知ることができました。プレゼンテーションの途中、電子カルテについて議論が盛り上がり、留学生と吉田さんが意見交換していました。私は知識のなさや英語力のなさのため、話についていけませんでした。学校

で学ぶ勉強以外の薬学業界のこと、日本の現在の医療体制などを知っていく必要があると感じました。

プレゼンテーションの後はグループごとに「セルフメディケーション」「代替医療」「高齢社会」「ターミナルケア」についてディスカッションしてもらい、現状と今後の展望について発表してもらいました。どのグループもディスカッションが始まったばかりの時は皆緊張した様子でしたが、だんだん意見交換が活発になり最後は時間が足りないほどでした。私は司会進行役だったため、ディスカッションには参加できませんでしたが、どのグループも難しい内容ながらも知恵を絞りながら留学生と意見交換をしていました。代替医療について話していた班のインドネシアからの留学生はインドネシアでよく使われている伝統的なオイルを教えてくださいました。(写真12) 実際に使わせてもらいましたが、オイルを肌に塗るとだんだん暖かくなり、血行が良くなるのを感じました。血行をよくするので肩こりや冷え性に効くと言っていました。彼女は毎日オイルを使ってマッサージしているそうでした。トルコからの留学生は熱心に病院で働く薬剤師



(写真12) 代替医療についてディスカッションしている様子

について話していました。日本の病院の種類(国立病院、私立病院、町にある小さな病院など)とその役割や違いについて質問していました。参加した学生は低学年が多かったため正確な知識がなくきちんと答えられずに困惑していましたが、当の私も知識不足のためあまり答えられませんでした。将来医療人として働くのに知らないことがたくさんあることに気付かされました。



(写真13) 高齢社会についてディスカッションしている様子

ディスカッションの後はグループごとに話した内容とそのトピックの現状と今後の展望について発表してもらいました。(写真14) 発表ではディスカッションに参加したすべての学生が英語で発表しました。



(写真14) 発表の様子

参加した学生は「日本語で意見を言ったり理解するのが難しいくらい難易度の高いテーマだったが、真剣に考えて意見を伝える『挑戦』ができて良かった。あらかじめテーマについて考えておけばもっと話せたと思った。発表の時間では他の班の意見を聞いて良かった。

参加した学生は「日本語で意見を言ったり理解するのが難しいくらい難易度の高いテーマだったが、真剣に考えて意見を伝える『挑戦』ができて良かった。あらかじめテーマについて考えておけばもっと話せたと思った。発表の時間では他の班の意見を聞いて良かった。

た。日本人と留学生で構成されるグループだからこそ多様な考えに触れることができた。参加者全員が一言ずつ意見を発表した。人前で話すいい練習になった。留学生は英語が流暢だった。話し合うにはもっと英語力を高めないといけないと思った。」とっていました。

私自身、テーマを考える際とても悩み、難易度や議論が展開されなかったら、などと不安に思いディスカッションの助けになればと簡単な概要資料を用意するなど工夫しました。実際では確かに難易度は高かったようでしたが最後にはきちんとまとめられるほど素晴らしいディスカッションになりました。

## 8. パーティー

ディスカッションの後は、大阪薬科大学でのアクティビティのすべてが終了した締めくくりとして、小さなパーティーを学生会館のホールにて行いました。(写真15)参加者はディスカッションに参加した大阪薬科大学の学生と留学生で行い、皆でオードブルや日本のお菓子を食べながら交流をしました。参加者は食事



(写真15) パーティーの様子

をとりながらプレゼンテーションやディスカッションの際に気になった質問をしたり、趣味の話や学校生活について話したりしていました。

講習会やプレゼンテーションなどの勉強会中では時間がとりにくかったフリートークの時間をとることができ、参加者と留学生の交流をより深めることができ良かったと思います。

## 9. 参加者の感想

二日間を通して参加した学生は「知識の乏しさや言葉の壁、コミュニケーションの難しさを痛感した。それでも英語での会話を試みたことや何とか伝えようと身振り手振り駆使したことは講義では得られない貴重な経験となった。今回の活動で得たことを今後の薬学生としての成長に繋げていきたい。」「今回の勉強会はただ母国語でない言葉でうまく指導・意思伝達することの難しさを実感するだけではなく、各国での考え方や指導方法の違いを知ることができた。また、海外の薬学生は医療の知識だけではなく自分の意思をはっきり持ち、私の考えの浅さを実感した。これからは外国人が薬局を訪れるということも増えてくると思うのでこの経験を生かして薬学生として自分を高めていけたらいいなと思った。」とっていました。他の参加者からも「留学生と交流する機会がありとても貴重な経験になった。これから英語力を鍛えたいと思った。」など様々な感想を頂きました。

## 10. 最後に

二日間を通して延べ55人が参加しました。たくさんのお阪薬科大学の学生と留学生が交流することができ、留学生にとっても私たち大阪薬科大学の学生にとっても大変貴重な経験をする事ができましたことを、この勉強会に携わったすべての方に心より感謝申し上げます。

この勉強会を企画するに当たりたくさんの方々のご協力を得て成功させることができましたが、このプロセスの中で英語力や薬学の知識のみならずたくさんの方のことを考えさせられ経験することができました。企画運営にあたり共に協力してくださった仲間、先生方なしではこのような勉強会を開催することはできませんでした。

2日間という短い間でしたが、共に服薬指導を英語でしたり、各国の薬学部についての情報交換をしたり生薬学実習をしたりと、大変濃い時間を過ごさせていただきました。勉強会の合間にも、留学生と薬学、学校生活についていろいろなことを聞くことができ、日本と海外の相違点を発見できましたし、今まであって当たり前だと思っていた施設のありがたさを感じたり、日本の薬剤師や医療制度についてももっと勉強しなければならないと刺激を受けました。また、普段授業で学んできたことが役に立った場面も多く、勉強してきたことを実際にアウトプットする場にもなったことに感動しました。日本の薬学生も海外の薬学生も学んでいることは同じなのだ実感し、言語は違っても同じ知識を持っている同じ薬剤師を目指す薬学生が世界中で共に一生懸命勉強しているということに気づきました。当たり前のことですが、このことに気づき、世界水準の薬学生のレベルに相当するように日々の授業を大切にさまざまな知識をつけなければならないと思いました。

この国際交流を通して実際に自分の目で海外の薬剤師を見てみたいと思いましたし、自分の英語力や薬学、日本の医療制度についての知識の乏しさに改めて気づかされました。このようなかけがえのない経験ができたのも国際交流基金のおかげです。今回の勉強会で学んだ数多くの知識を無駄にすることなく、これからの大学生活において、また薬剤師になってからも、この経験を生かしていきたいと思います。ありがとうございました。